

腰下肢痛・間歇性跛行に対し神経ブロック療法と足漕ぎ車椅子運動を併用した 1 例

江原弘之¹⁾ 澤田義則¹⁾ 稲川利光(MD)¹⁾ 安部洋一郎(MD)²⁾

NTT 東日本関東病院 リハビリテーション科¹⁾ ペインクリニック科²⁾

Key words 腰下肢痛 神経ブロック療法 足漕ぎ車椅子

神経ブロック療法と足漕ぎ車椅子を使用した運動療法を行い、歩行能力が改善した腰下肢痛の患者を経験した。【症例および経過】70 歳代女性。診断：腰部脊柱管狭窄症(L3/4/5)・腰椎椎間板ヘルニア(L5/S)。主訴：右腰下肢痛、間歇性跛行(30m)。X 年 Y 月当院整形外科受診、1 ヶ月後ペインクリニック科を紹介受診。10 ヶ月後に重量物の運搬で症状増強し同科に入院。抑うつ傾向(SDS:42/80)あり、ADL 低下を認めた。入院後は、内服薬投与、大腰筋溝ブロック、腰部硬膜外洗浄、神経根ブロック、椎間板造影、運動療法を実施。疼痛は軽減したが立位時の下肢痛や間欠性跛行が遷延したため、足漕ぎ車椅子でのペダリング運動を追加した。VAS は 95/100 から 11/100、歩行速度は 25.4m/min から 52.3m/min に、歩行率は 70.5steps/min から 107.9 steps/min に改善。Barthel Index は 65 点から 90 点となり自宅退院となった。【考察】神経ブロックによる腰下肢痛の軽減と、疼痛が少ない坐位姿勢で行うペダリング運動との相乗効果で歩行が改善したと考える。運動を継続できた要因には生活範囲拡大を自力で達成できた心理的な影響もあったと推察する。【結語】慢性腰痛患者は疼痛・心理状態など多くの要因が複合し改善に難渋することが多い。ペインクリニック科と連携し、運動療法を工夫したことが ADL・QOL の改善に有用であったと考える。